

2023年度鳴門市人権地域フォーラム(記録)

テーマ 「ひとごと」から「わがこと」へ

～自己をみつめ、語り、人と人がつながる人権学習～

日時:2023年8月23日(水)13:30開会

会場:ボートレース鳴門 なるちゃんホール

コーディネーター 森口 健司(T-over人権教育研究所共同代表)

パネリスト 吉成 正士(人権を語り合う中学生交流集会“23 運営委員会事務局)

中野 伸二(T-over人権教育研究所 人権こども塾クルー)

佐伯 孝代(鳥取県倉吉市たんぼぼの会代表 同和教育幸せ配達人)

《司会者》

お待たせいたしました。定刻となりましたので、只今から2023年度鳴門市人権地域フォーラムを開催させていただきます。初めに資料の確認をさせていただきます。青い資料が1枚、中にアンケート用紙が入っております。2種類ございますでしょうか。

また、受付の方でボールペンと飲料水をお配りしております。もし、ない方がいらっしゃいましたら、受付の方までよろしく願いいたします。また、本日は手話通訳を特定非営利活動法人「あたたかい手コラボ」の皆様をお願いしております。よろしく願いいたします。

なお、本日のフォーラムは15時30分を閉会予定とさせていただいております。お手元のアンケートについては、お帰りの際に、受付のアンケート回収箱に入れて頂きますよう、ご協力をよろしくお願いをいたします。それでは、最初に主催者を代表いたしまして、鳴門市教育委員会教育長 三浦克彦よりご挨拶を申し上げます。

《鳴門市教育委員会教育長》

(席を立ちマイクに近づくと、壇上と参加者に一礼して)皆様、こんにちは。(会場より「こんにちは」)本日は、鳴門市人権地域フォーラムにご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

このフォーラムは、長年にわたって、(後ろを振り返り、テーマの描かれたパネルを指しながら)ここにも出ております『ひとごと』から『わがこと』へ」というテーマで実施をさせて頂いております。

このフォーラムの持ち方としては、こちらの森口健司さんにコーディネーターをお願いをして、パネリストの語り、それを踏まえた形で、フロアの皆様が自らの思いを語っていただくというようなスタイルを、ずっと取っております。本日も、3名のパネリストの皆様をお迎えしております。吉成さん、中野さん、佐伯さん、よろしく願いいたします。

昨年は、水平社宣言から100年ということで、島崎藤村の「破戒」が映画化をされました。皆様方も、ご覧になられた方もあったのではないかと思います。今年、1923年に起こりました「関東大震災」から100年ということで、震災の数日後に起こった「福田村事件」を題材とした映画が9月1日に全国公開されることになっています。

関東大震災については、中学校の歴史の教科書にも記されておりますけれども、震災の混乱の中で、朝鮮

人が井戸に毒を入れたであるとか、暴動を起こそうとしている、そういった理由でデマが広がる中で、住民が組織した自警団であるとか、警察や軍隊によって、多くの朝鮮の人たちが殺害をされたということは、よく聞かれていることだと思います。

「福田村事件」というのは、震災は9月1日ですけれども、9月6日に千葉県で起こったということです。香川県からの薬売りの行商の一行15名だったそうですけれども、その15名のうち、男女9名が「言葉が変だ」、というのは、彼らは讃岐弁を話す。そういったところから、「言葉が変だ」ということで朝鮮人に疑われて、そして、住民が組織をした「自警団」によって殺害をされてしまったという事件です。

この映画を製作した監督さんの話を、私は耳にしたことがあるんですけど、今の私たちの社会は、SNSの影響力が大きくなっていて、情報が過剰な時代に私たちは生きているわけですけれども、そうした中で、福田村事件というのは、形を変えて今の私たちの社会に起こりうるものであって、「私たち自身が、当時の村人のようになるかもしれない」という自覚を、この映画を通して、しっかりと持って置いてほしいというようなことを語られておりました。

普段は、心優しい村人たちが、暴走をするに至るわけですけれども、集団心理であるとか、職業や能力に対する差別意識によって、暴走をして、非常に悲惨な事件となったわけですけれども、そういったことが、私たちにも形を変えて起こりうるかもしれないという自覚を持ちたいというようなことをおっしゃっておりました。このことが、まさに「わがこと」として考えることなんだと、私は思っております。

先ほども申しましたように、このフォーラムというのは、「ひとごと」から「わがこと」へということを一貫して、テーマとして持ち続けて開催をしております。

本日のフォーラムでも、コーディネーターやパネリストの語りを通して、同和問題を始め、様々な人権問題というものを「わがこと」として捉え合う。そして、自分の生き方をつくっていく、人生をつくっていくのは自分自身である。あるいは、社会をつくっていくのは私たち自身である。人権尊重のまちづくりを行なっていかなければならない。進めていかなければならないと思うところです。

終わりになりますけれども、本日のフォーラムが、参加者の皆様にとって実り多いものとなりますことを祈念申し上げますと共に、本日のフォーラムの開催にご尽力いただきました関係者の皆様に、お礼を申し上げます。会場と壇上に深く頭を下げ、挨拶を終える。会場より大きな拍手)

《司会者》

それでは、本日登壇いただいている講師の方々をご紹介します。皆様向かって右側から、本日のフォーラムのコーディネーターを務めて頂きます、T-over人権教育研究所共同代表 森口健司さんです。(立ち上がり「よろしくお願いします」挨拶をし、着席すると同時に大きな拍手。パネリストも、同様に名前を呼ばれる度に立ち上がり、挨拶と拍手が繰り返される)

続きましてパネリストの方々のご紹介をさせていただきます。人権を語り合う中学生交流集会23+運営委員会事務局 吉成正士さんです。続きまして、T-over人権教育研究所・人権こども塾クルー 中野伸二さんです。続きまして、鳥取県たんばぼの会代表・同和教育幸せ配達人 佐伯孝代さんです。

それでは、森口さん、以後の進行につきましてよろしく願いいたします。

《コーディネーター 森口健司》

はじめに

(立ち上がり、元気よく)皆さん、こんにちは。(しみじみと思いを込めて)4年ぶりです。制限なく皆さんに集まっていただく集会になりました。この3年間、「実施できるかどうか」ということもありました。また、延期して2ヶ月先の10月に実施したこともありました。コロナ禍の厳しい現実を事務局の皆さんが踏ん張って積み上げてきました。

教育長さんの挨拶にもありましたが、人権教育における行政職員の言葉、教師の言葉というのは、大きな意味を持っていきます。その本気という言葉というのはいつも心に染み込んでいきます。

人権学習は私たちの本気が問われます。何より、行政職員や教師の熱が問われます。板野中学校で、1990年にスタートした全体学習、これは、教師自身をさらけ出しての営みでした。その教師の姿が、子どもたちの魂の叫びを生んでいきました。その本気の語り合いが、今日の集会にもつながっています。そして、そこに培われた絆、そこで語り合われた言葉が、10年経とうが、20年経とうが、30年経とうが、昨日のこのように鮮やかによみがえります。子どもたちの中に生涯にわたって生き続ける人権学習のよろこび、それは、板野中学校だけじゃなくて、すべての学校でそういう営みが積み上げられていくべきだと思います。それがこの教育のよろこびです。

松茂中学校のチーム担任制が拓く語り合いの人権学習

私は松茂中学校という学校で7年目を迎えているんですけど、今、64歳で14歳の50年の開きのある子どもたちと、板野中学校の全体学習につながる語り合いが展開されています。

そのきっかけは、松茂中学校が4年前から実施しているチーム担任制が、そのような人権学習へとつながっています。チーム担任制は、現在、瀬戸中学校の校長をしている近藤太先生の強力なリーダーシップによって実現しました。この営みにより、厳しい状況にあった教師と生徒が救われていきました。

そして何より、この取り組みは、人権学習における学級間格差を克服し、すべての学級の子どもたちがいきいきと自分を語る人権学習を、すべての子どもたちに届ける状況を生んでいきました。

具体的に言います。松茂中学校に赴任した7年前、2017年度に3年生を担任し、学級開きの人権学習から繰り返し、人権学習を積み上げていきました。7つに授業記録が、実践記録にまとめられています。この時私は、58歳、15年ぶりの学級担任として、大きなよろこびを噛みしめての人権学習の積み上げでした。しかし、それは私のクラスだけです。他のクラスの人権学習の中身は、全く違います。

結局、1つのクラスだけなんです。隣のクラスも同じような空気であるかと言えば、本心をさらけ出す人権学習は、本当に難しいことです。人権学習は、教師と生徒の魂と魂のぶつかり合いです。それが、板野中学校ではある時期全体学習として、学年全体のものとなっていきました。今、振り返ると、あの教育実践は、夢のような世界を私に届けてくれた人権学習でした。

その夢のような人権学習は、今、チーム担任制で、学年4クラス、同様の人権学習を積み上げることで、学級間の格差をなくし、私の想像を超えるいきいきとした語り合いが実現しています。

生身の人間がその生身をさらけ出す。その営みが、学年の4クラスすべてで実践される。この営みは、私にとってもとてつもなく大きなよろこびです。

1991年度板野中学校3年B組の同和問題学習に学ぶ語り合いの人権学習

このチーム担任制によって、4クラス同様の人権学習を展開することによって、確実に学級間の格差が消えるんです。同じ思いを込めて、同じ熱量で、すべてのクラスで人権学習を実践すること、それは、私自身の思いを強くし、それぞれの高まりが見事に他のクラスに波及していきます。

板野中学校の全体学習がよみがえっていきます。

(スクリーンに、第25回全日本中学校道德教育研究大会の場面が映し出され、それを指しながら)

私が担任した板野中学校3年B組の生徒たちが、1991年10月31日(木)に徳島市立富田中学校の体育館で、第25回全日本中学校道德教育研究大会の特別公開授業に取り組みました。

この授業がきっかけとなって、私は文部省(現：文部科学省)の道德教育読み物資料作成協力者会議の委員となり、部落問題に関わる道德資料「スダチの苗木」と「峠」を書くようになります。

当時文部省にとって絶対的にタブーだった部落問題に関わる資料が、文部省から日本全国に発信されることとなります。特に、結婚差別の現実を著した「峠」は、今、徳島県の中学3年生のほとんどが、人権学習の資料として授業をしています。

隣の香川県でも、愛媛県でも、私が勤務する松茂中学校でも、結婚差別について考える授業に取り組んでいただいています。そんな道德資料を作成するきっかけを作ってくれた板野中学校3年B組の生徒たちが語り合った人権学習の映像を観たんです。

(画面に1人の男子中学生の言葉が映し出される)

その人権学習を終えた休み時間に、一人の生徒が、私のもとにやってきてこう言うんです。

「先生、僕たちのクラスも、板野中学校の3年B組のようなクラスになれますか？」

この言葉はすごく心に響きました。

私はすかさず言葉を返しました。

「もう、なっていきよるよ。」

生徒は嬉しそうに「そうですか」と答えました。

この板野中学校の生徒たちの語り合いに出会った感動が、板野中学校へのあこがれとなり、生徒一人一人の確かな語りを生んでいくんです。まさしく生徒の語りが他の生徒の語りを生んでいく人権学習につながっていくんです。

今から、1学期の後半、7月13日(木)に「1991年度板野中学校3年B組の同和問題学習に学ぶ」をテーマに、自分自身の思いや願いを語り合った松茂中学校2年D組の人権学習の一部を紹介します。

この授業で私が語ったのは、授業の導入の言葉だけです。私の授業の冒頭に次のように語りました。

【松茂中学校の校長先生が、皆さんに繰り返し語っている言葉がありますね。

(この教師の問いかけに生徒から「自律」「協働」「エンパワメント」の言葉が返ってくる)

そうです。

「自律」「協働」「エンパワメント」です。

この言葉は、人権学習の本質を問いかけている言葉なんです。

まさしく人権学習は、自律、協働、エンパワメントを育んでいく学習です。

「自律」とは、規範に従い行動することです。それは人権学習において、自らの意志で挙手し、主体的に思いを語ることです。

「協働」とは、大切な仲間と目標を共有し力を合わせることです。それは人権学習において、一人一人の思いを語り合うことなんです。

「エンパワメント」とは、共に全力を尽くし、自他共に自信をつけることです。皆さんは、人権学習において、共によくなる仲間づくりを語り合いの中で築き上げていくんです。

この人権学習の本質である「自律」「協働」「エンパワメント」の意味を1991年度に実施した第25回全日本中学校道徳教育研究大会の特別公開授業は教えてくれます。

この授業に取り組んだ板野中学校3年B組から、皆さんはどのようなことを感じ、学ぶ取ることができましたか。皆さんに観てもらった授業の後半は、終始生徒の語り合いで展開されます。

授業者の私は、次から次へと挙手する生徒を指名するだけでした。そして、最後に、「3年B組の絆」と板書して授業を終えました。この次から次へと生徒一人一人が挙手し、一人一人の思いや願いを語り合う人権・部落問題学習が文部科学省の道徳教育読み物資料の中に初めて、部落問題に関わる資料が掲載されるきっかけをつくってくれました。

私は教師になって42年になりますが、このような授業を板野中学校3年B組の生徒たちとできたことが、私の人権教育・同和教育のよるこびとなっています。この板野中学校3年B組の語り合いから学んだことをいきいきと語り合う授業をみんなでつくみましょう。】

この私の問いかけに、次から次に手が挙がっていくんですね。私はまったくしゃべりませんでした。主体的な挙手によって、語りによって、ずっと深まっていくんです。次から次へと語っていくんです。生徒たちはマイクを握り、前に出てクラスみんなの前で語ります。

僕も語りたい、私も語りたい、繰り返し挙手し、2回、3回と発言を繰り返す生徒が出てきます。

時間の関係で授業の後半の語りを紹介していきます。

まず、板野中学校3年B組の語り合いに寄せる思いと、思いを語った後の清々しい気持ちをクラスメートに伝えた発言です。

＝映像① 中学生男子TMの語り＝

僕は、板野中学校の3年B組の授業から学んだことは、授業に取り組む姿勢です。僕は、前回の授業で、板野中学校の公開授業の動画を観て、あれだけ手が挙がって、聞くみんなの目線とかすごくて、公開授業だから、お客さんも周りにたくさんいる中で、あれだけ「わがこと」として、全員が考えて発言できている雰囲気はやっぱりすごいなって思いました。

だから、今の2年D組でも、そういう雰囲気で授業を受けたいなって思ったし、この3年B組の授業に、僕も実際に行ってみたかったなあって思いました。やっぱり、あれだけの雰囲気の授業ができるっていうことは、先生と生徒たちの信頼と尊敬の関係だったり、生徒同士の共感と連帯とかがあって、あれだけの授業ができて、それプラス、周りで部落差別とかが実際にあったっていうのもあって、あれだけ「わがこと」として考えれば、考えを深め合って、またさらに深い意見を出し合えていたんだと思います。

僕は、こうやってみんなの前に立って発表するのはとっても緊張するし、でも、実際、こういう発表が終わった後って、めっちゃスッキリするっていうか、楽しいなって思えてくるんです。前回の学年での意見発表会の時とかも、僕はKY君の代役で前に立って発表することになったんですけど、他人の作文かもしれんけど、それを実際に自分が言っている、みんなの真剣な視線とかも感じて、自分にも大分刺激を受けたし、みんなが順に発表する時も、自分が意見を言っているめっちゃ楽しかったです。

その意見を言った後のあの気持ちを、言葉で表すことは難しいんですけど、その気持ちをみんなにも味わってほしいなって思っています。僕自身も、こういう立場になってみんなの前で発表して、自分も考えを深めて、周りの人の考えとかも変

えていける発表ができたらいいなと思います。

この生徒の力強い、いきいきとした語り、クラスの雰囲気をもより温かいものにしていき、次から次へと発言が続きます。家族や友達に対する誠実な思いを伝えた言葉です。今日帰って、お父さんやお母さんに「いつもありがとうね」と伝えてほしいという言葉が、クラスの中に柔らかい感情を生み出していきます。

＝映像② 中学生男子HUの語り＝

僕は、もう一つ言いたいことがあります。皆さんに家族と友達は絶対に大事にしてほしいということです。お母さんだったら、朝ご飯作ってくれたり、洗濯をしてくれたり、いろいろ僕たちに欠かせないことをしてくれて、お父さんだったら、遊んでくれたり面倒を見てくれたりして、お母さんの手伝いでご飯を作ったりして、毎日仕事にも疲れて大変だと思います。

なので、皆さんに1個やってほしいことがあります。今日帰って、お父さんお母さんに「いつもありがとうね」と伝えてあげてほしいです。多分、絶対喜んでくれると思います。

もう一つは、友達を大切にすることです。友達とケンカしてしまって、仲直りできんと過ごしてしまう人もいます。でも、ケンカしたら先に謝って、仲直りしてほしいです。

友達は絶対欠かせないものなので、大切に大切に思ってください。信頼できる友達を見つけて、わからんところがあったら、その友達に聞いたりして、一緒に仲のいい友達と協力して、ケンカのないように頑張ってください。

この生徒が語った友達とケンカしたときは、先に謝って、仲直りしてほしいという言葉に、心を揺さぶられた生徒がすかさず挙手をし、この生徒の思いを伝えます。

僕はいつも最初に「ごめんなさい」って言えないという言葉が、クラスの中になんとも言えない温かい雰囲気を広げていった語りです。

＝映像③ 中学生男子SHの語り＝

さっき、HUさんが言っていて、友達を大切にすればいいみたいなことを言っていた時に、僕は、何回かHUさんとケンカしたことがあるんですよ。で、僕はいつも最初に「ごめんなさい」って言えないんですよ。HUさんから「ごめん」って言っていつも来るから、ケンカしたら、なるべく先に「ごめん」って言いたいです。

板野中学校の語りを見て、僕は、一人が手を挙げて語ると、次々に語っていく素晴らしいところだと思いました。板野中学校みたいにはなれないかもしれないけど、板野中学校みたいな友達の関係を築いていきたいです。

語り合いの人権学習が培っていく温かい言葉は、心を豊かにしてくれます。次から次へと思いをつないでいく仲間に、自信に満ちた言葉で、「どんどん発表して、日本一の板野中学校を抜いて、日本一になりましょう」と高らかに宣言した生徒の言葉です。

＝映像④ 中学生男子KYの語り＝

K君やU君のように、2回発表する人が多くなってきた時に言いたいことがあります。板野中学校の生徒は、前に森口先生は「日本一」だと言っていましたが、僕たちは、この日本一を超えたいと思います。勝算はこのクラスにあると思います。僕は今、めっちゃ緊張していますが、他のみんな、発表してない人は才能があると思うので、どんどん発表して、この日本一の中学校を抜いて、日本一になりましょう。ありがとうございました。

純粋な言葉です。これはどこの学校もそうです。教師が本気で語ったら、生徒は本気で返してきます。そのやり取りに子どもたちは力をもらいます。この後も純粋な語りが続きます。この語りも、心に沁み込みました。

＝映像⑤ 中学生男子KGの語り＝

突然ですが、もしもこの世界に人権学習がなければ、皆さんは部落差別やその他の差別について、考えますか？

多分、僕は考えないと思います。今まで、僕は部落差別についてあまり関心がなく、何なら、差別するような心を持っていました。

ですが、中学生になり、しっかり授業を受けていると、僕は今まで自分がしてきたことの愚かさに気づきました。また、板野中学校の皆さんは、自分から手を挙げて発表していましたが、僕は、自分の言葉を語るどころか、自分から手を挙げて発表することが苦手で、というか、嫌いでやりませんでした。ですが、僕はこの発表を機に、1段階進化して、自分から手を挙げて発表できるような人間になりたいです。ありがとうございました。

中学生の言葉は本当に美しいです。なんか、体が熱くなります。本当に愛おしくなります。そして、子どもたちの思いは家族への深い語り、「産んでくれてありがとう」と言うと、お母さんはすごくうれしいと思うという言葉が、心に染み込んでいきます。感謝の中を生きる子どもたちは本当に幸せです。

＝映像⑥ 中学生男子DKの語り＝

ラスト、1回発表させてください。まあ、2年生全体で発表した時のことなんですけど、1回僕が、人と人の境目というのを話して、それに少しだけつけ加えて。アニメのテレビ版である「エヴァンゲリオン」っていうやつを見たことある人ならわかるんですけど、人と人は、境界線っていうのがあって、その境界線に入り込むのはすごく難しいことなんで、この場で境界線に入り込めるんだったら、入り込んでほしいんです。その、人と人の境界線に入り込めると、その人と仲良くもなるし、森口先生が大量に書かれている「心友」、一生付き合っていける仲間ってなるかもしれないです。だから、今この場で発表したりして、相手の境界線に入ると、その人と仲良くなれたりするので、みんな発表してほしいです。

話が少し変わるんですけど、HUさんがさっき、20分前くらいに言ってくれた、友達と家族を大切にしてほしいっていうんですけど、それに少しだけつけ加えて、お父さんとお母さんとか、おじいさんとおばあさんに言う言葉で、お母さんに言う言葉で1番初めに言わんとあかん言葉って言うんだったら、「生んでくれてありがとう」っていうのが当たり前だと思うんです。僕は…。

何で「生んでくれてありがとう」って言わなあかんかっていうのは、自分らの命は、お母さんの身体からもらってきているものだから、世の中、お母さんが子どもを産んで、その代わりお母さんが死ぬっていうこともあるんです。だから、そのお母さんが生きとるっていう人は、初めに、絶対に「産んでくれてありがとう」って言ったら、お母さんがすごくうれしいと思います。

人間は親孝行をするっていう際にだったら、言葉とかお金を使うとかじゃなくて、いつもながらの態度で、あれしようとかこれしようとか言う方が、お母さんも楽だと思います。どれだけ高い店に連れて行っても、「いける？」とか心配されてしまうし、いろんなきれいな言葉を使ったとしても、なんか変やなって思われてしまうので、お母さんや友達を大切にするっていうHUさんの意見が、僕はとてもよかったと思います。

だから、HUさんが発表してくれたのと、僕のを少しつけ加えて、お父さんとおばあちゃんとか、おじいちゃんには、「育ててくれてありがとう」で、お母さんには、「ご飯を作ってくれてありがとう」とか、「身の回りのことをしてくれてありがとう」っていうのと、プラスで「生んでくれてありがとう」と言うと、お母さんはすごくうれしいと思うので、みんな言ってあげてください。

家族への感謝を語る中学生の言葉は本当に美しいです。家族や仲間への信頼と尊敬、感謝を語り合う授業は、時間がアツという間に過ぎていきます。

最後の最後に、2回3回発表した生徒が、「人権学習の利点」という言葉を素直に語ります。そして最後に締め括った「前に立って発表できることが、『ああ、今一番楽しいな』と思う瞬間です」という言葉が、教室全体に語り合いのすばらしさと感動を届けていきました。

＝映像⑦ 中学生男子YKの語り＝

まあ、授業も終わりに近づいてきているので、私なりの「人権学習をすることの利点」というか、楽しいこと、うれしいことを発表したいと思います。やっぱり、誰にでもあると思うんですけど、僕にも、嫉妬だとか妬みだとかがあるんですよ。自分よりいいものを持っている人に対しては羨むし、自分よりいい成果をあげた人に対しては、嫉妬するし。

やっぱり、人間なので、どうあってもその思っているのは消しきれないんですけど、こうやって人権学習をしている時だけは、そんなことを一切考えずに、本当にきれいな清々しい気持ちで、他人の意見を聞いたり、自分でこうやって前に立って発表したりできることが、人権学習をやって「ああ、今一番楽しいな」と思う瞬間です。

時間はほとんどないけれど、また次にこういう授業があったり、もうしばらく時間があるので、是非発表してください。ありがとうございました。

本気で語ったら体が熱くなります。その言葉が自分を癒し、仲間を癒していきます。この授業の最後に、家族から刷り込まれてきた「寝た子を起こすな」という意識が大きく変わった生徒の語りです。板野中学校3年B組の語り合いから、同和教育の重要性をしっかりと学んだ生徒の言葉には力があります。「同和教育を行うことによって、少しずつ差別など減っていったと感じた」と素直に語る言葉は、同和問題に無関心な大人たちに届けたい語りです。

＝映像⑧ 中学生女子MAの語り＝

私は、板野中学校の人たちが部落問題についての学習をしているのを見て、やはり、部落問題について考えるといった同和教育は必要なんだなと思いました。本音を言うと、私は前まで、人権・同和教育をすることによって、差別をすることはいけないと意識はされるが、それと同時に、差別を知らなかった人に対して、差別が生まれてしまうことがあるのではないかと思っていました。しかし、同和教育を行うことによって、少しずつ差別など減っていったと感じたので、これからもこのような同和教育をしていく必要があると思いました。

板野中学校の人たちが部落問題について学習をしている様子を見ると、みんなが、部落問題について考え、意見を出し合っていて、みんなが本気で取り組んでいたのも、このクラスでは、絶対に差別など起こらないのではないかと思います。

このクラスの人たちのようにみんながなるには、一人一人が自分の問題として考えることが大切であると思います。また、差別をなくすには、社会全体が人権を配慮するなど、サポートする必要があると思いました。

同和問題などの問題をなくすためには、自分ができていることを考えてみると、同和問題について正しい認識を持ち、日常生活の中で人権感覚を磨いていくことではないかと思いました。以上のことから、私は、部落問題について正しい認識を持つことと、日常生活の中で人権感覚をみがくという、2つのことを実行していきたいと思いました。

同和問題を解決するために自分にできることとして、自らに問かける言葉には、中学生の純粋さが心に染み込みます。本気の人権学習は、すべてを変えるということを実感します。

最後に、T-over人権教育研究所の中に、「人権こども塾」という、主体的な学びを中学生集会から繋がっている、この会場の中にもいる生徒の語りです。それは本当に純粹です。

高校生から学んだこと、「T-over人権教育研究所・人権こども塾」で学んだこと、仲間のこと、自分が頑張っていること。素直に語った言葉というのは純粹です。美しいです。しっかりとした語り受け止めてください。

＝映像⑨ 中学生女子NYの語り＝

私は、この資料を読んで、「何でも、1度でいいから発表してください」とか、「何も感じないんですか」とかいう意見がありました。でも、私は意見を發表しなくても、ちゃんと考えていると思います。人によって伝える手段は違うし、生活ノートに綴る子もいれば、心の中に止めておくっていう子もいるわけで、発表する子が一番正解というか正しいっていうのは、違うんじゃないかなと思います。

自分自身、他人の前で話すのは苦手で、それは今も変わっていません。でも、いつも休み時間に友達とワアワア話しているみたいに、少しずつ他校の人と話せるようになってきたのは、小学生の時には絶対なかったことで、成長したことだと思います。

「人権こども塾」に参加している、今も通っている4～5人の高校生の方は、自分の意見を持つことを大切にしている、自分もすごく尊敬しています。その方は、「できたら発表してほしい」と言っているけど、私が1回も発表しなくても、「今日はありがとう」とか、優しい言葉をかけてくれます。それは、今までいろいろな手段で思いを伝える人に出会ってきたからだと思います。私もできる限り、声に出して伝えようと思うけど、それと同じくらい、文字で生活ノートに綴ることを大切にしていきたいです。

そして、資料の中でも出てきた「心友」は、人生の中でほんの一握りの友達だと思います。たとえ、心友ができて、その人の全てが好きではないと思います。嫌なところも絶対あるし、苦手よりも好きなのところが多い関係が心友なんだと思います。でも、まだ14年くらいしか生きてないけど、今仲良くしている友達がいて良かったと思います。ありがとうございました。

語る生徒ばかりではないんです。語らない生徒もいるんです。でも、語れなかった生徒もうれしいんです。次から次へ手が挙がっていく。本気の言葉というのは、クラス全体を癒して行って、そのクラスを誇りとしていくんです。信頼関係というのは築けます。

今日もそうです。後半、意見交換をしていきますけれども、マイクを持たれるのは数名の方です。でも、子どもたちには生活ノートというのがあるんです。みんなが中野伸二さんのことを書いてくるんです。そのことが、その生徒自身の成長につながっていくし、その成長を仲間と共有できるんです。そんな関係性、信頼と尊敬の絆の中で、一人一人の生徒はいきいきと成長していきます。

人権教育というのは「共感」と「連帯」です。「信頼」と「尊敬」です。「互いへの感謝」です。この関係ができれば、私たちの社会が本当に生きやすいものになっていきます。

(画面に1枚の新聞が映し出される)これは2年が経ちましたが、2021年5月1日の新聞です。

八万中学校で営まれた全体学習が大きく取り上げられています。そして、T-over人権教育研究所を立ち上げた吉成先生のことが中心に書かれています。

写真には、吉成先生と中野伸二さんとはなさんが取り上げられています。

これがきっかけで、昨年の人権を語り合う中学生交流集会で、中野伸二さんは小学校4年生のお嬢さんを連れてきて、パネリストをしてくれたんです。そこで、自分が部落出身であるということをお嬢さんに伝え

ていきました。そのことが、徳島新聞の「鳴潮」で取り上げられています。

今日お配りした資料にその新聞記事があります。その記事をその朗読をさせていただきます。

＝徳島新聞 2022・9・19「鳴潮」新聞記事＝

昨年春、取材で会った当時40歳のしんじさんは悩んでいた。自分が徳島県内の被差別部落に生まれ育ったことを娘さんに言うべきか言わざるべきか。しんじさんと長い付き合いの中学教諭から先日、便りが届いた。

「覚悟を決めて夏休み中の中学生人権集会でパネラーを務めた彼は、小4の娘を連れてきました」

しんじさんは大人になって職場で受けた差別や、本音で語り合える友の大切さに加え、娘を連れて来た思いを語った。

集会の夜、しんじさんは教諭にメールを送った。「彼女は楽しかったと言ってくれました。テンション上がりまくりでママに今日の出来事を一生懸命伝えていました。部落差別という言葉も出てきました。何とも言えない瞬間でした。私の生い立ち、この子の生き方が縦に並んだ瞬間です」

差別のない社会を求め、被差別部落出身の人々が全国水平社を創立して今年で100年。

部落差別を主題とする島崎藤村の小説「破戒」が60年ぶりに映画化され、7月に公開された。

「部落差別がなくなっても、また新たな差別が生まれる」とのせりふがある。

現代社会は、部落差別の根絶を成しえていない上、ネットでの中傷、セクハラ、マイノリティへの差別…せりふ通りか、それ以上か。しんじさんの娘さんの未来にまで、そんな社会を持ち越したくない。

昨年の中学生集会の場面がよみがえってきます。彼は、今年も中学生集会でフロアから語っています。最後まで残って、最後に集合写真を撮るんですけど、その真ん中にも収まっています。

(しみじみと)この中学生集会というのは、彼が中学3年の時に始まりました。28年になります。この営みは、簡単に28年と言いますけれど、揺れて揺れてしながら、その営みを吉成先生が中心となっていてずっと記録にしてきました。

T-over人権教育研究所のホームページに、28年前から、呼び方は変わってきましたが、中学生集会の成果収録とポスターが紹介されています。

18年続いた中学生集会の成果収録も今年で28冊目になります。28年前に部落解放徳島県中学生集会から今年度の人権を語り合う中学生交流集会+23まで、ずっと運営の中心にいる吉成正士さんに、2021年5月1日の徳島新聞で紹介された八万中学校の全体学習から、昨年度、今年度の中学生集会における伸二さんとの営みを中心に語っていただきます。では、吉成さん、よろしく申し上げます。拍手をお願いします。(拍手)